

山上徹教授退職によせて

現代社会学部会長

河野 健男

山上徹先生は、現代社会学部が発足する前年の1999年に日本大学から本学に着任されました。現代社会学部の創設は、英語英文学科を中核にして、長い間、人文系女子大学としての歩みを進めてきた本学にあって、本格的な社会科学系専門学部をつくるというチャレンジであり、他大学にはない個性を打ち出そうということで、数年にわたる議論を経て現在は5つのコースがあります。その一つが、京都学・観光学コースです。京都学にせよ観光学にせよ、当時は、さまざまな専門領域からの学際分野であると見なされていましたから、明確に京都学・観光学を専門分野として打ち出した本学の姿勢は、社会的な衝撃でもありました。

山上先生は、京都学・観光学コースの「生みの親」であり、今日もまた看板教授であります。本学の観光学にホスピタリティという新しい概念を導入され、京都観光の真髄にホスピタリティを発見したのも山上先生でした。学部発足後直ちに、学部フィールドワークとして兵庫県の城崎でホスピタリティ研修を実施したのも山上先生でした。

ホスピタリティという新しい言葉が、学部学生の口から自然に出てくるのにたいした時間は必要ありませんでした。毎年のように登録上限を超えてゼミ所属希望者にあふれ、学部のなかで最も活気に満ちたゼミの一つでもありました。一般に、おもてなしとして理解されているホスピタリティの概念も、山上先生の独創的な研究によって進化してきています。ともすれば、サービス精神というような「心のありよう」としてのみホスピタリティは語られがちですが、山上先生の研究においては、「心遣い」といった精神的文化(ヒト)が基盤となって、これが集合されて接客のスキル・技といった制度的文化(コト)が形成され、その延長上に高度な品質を持った有形財としての物質的文化であるホスピタリティ産業(モノ)が成熟するであろうと構想されています。こうした山上理論の源泉には、先生が私淑する茶道が根付いています。ここに京都観光への接点が見出され、「京都観光学」(2000年)、「おこしやすの観光戦略」(2001年)、「観光の京都論」(2002年)など一連の京都観光学研究の成果が輩出され、現代における京都研究の新しい局面を切り開いています。

学会や行政とも関わりが深く、日本港湾経済学会や日本ホスピタリティマネジメント学会などの会長も務められ、京都創成百人委員会委員として京都検定の立案に深く参与されました。

学部としては、創設時のメンバーがご退職期を迎え、時間のたつ速さを改めて感じるとともに、現代社会学部の新たな飛翔を期さなければなりません。山上先生のこれまでのご活躍に感謝するとともに、ご健勝をお祈り申し上げます。